

## 久生十蘭論 補遺

須田千里

はじめに

一九九三年からこれまで、私は「久生十蘭論」と名付けた論考を九点公表してきた。その間、補うべき知見も蓄積され、全体に涉って細かな修正を要するものもある。今回は、その中から主なものを報告したい。

以下、本稿一では「新西遊記」について、神奈川近代文学館に所蔵される久生十蘭旧蔵資料の調査等で得られた知見を記す。二以降では、「湖畔」「白雪姫」「鈴木主水」「ボニン島物語」「奥の海」それぞれの材源を補足する。なお、行論上これまでの拙論と重なる点がある。以下、引用は初出に拠り、単行本所収等（定稿）との主な異同・注記を「」内に示す。また、引用文の傍線・破線・波線は対応箇所を強調するためであり、特記個所以外はすべて須田による。

一、「新西遊記」——久生十蘭特別資料、『馬蹄一万五千軒』——

「新西遊記」（昭和二十五年十二月「別冊文芸春秋」、ノチ昭

和二十七年九月文芸春秋新社『うすゆき抄』所収が定稿）については、「西蔵への旅、西蔵からの旅——久生十蘭論Ⅲ——」（一九九六年十二月「叙説」で考察した。その後、『定本 久生十蘭全集』8（二〇一〇年十一月国書刊行会）「解題」が久生十蘭遺品中の「新西遊記」と記された封筒（以下「封筒」と略）の存在を明らかにし、その中に入っていた「雑誌新聞の切り抜き」の筆者名とタイトルを紹介した上で、「一部は本作に取り込まれている。」と指摘した。所々傍線の引かれた切り抜きには、掲載誌紙名・掲載年月日等のメモがないが、科学研究費補助金基盤研究（C）「神奈川近代文学館所蔵久生十蘭特別資料に関する文献学的研究」（二〇二〇～二〇二二年度、課題番号20K00313）の調査を通じて、ほとんどの出典と本作での使われ方が判明した。その概要は二〇二三年六月の成果報告書中に記したが、ごく簡単（約九〇〇字）だったため、以下にその詳細を「新西遊記」の記述に従って述べる。また、これらとは別に、『馬蹄一万五千軒』の撰取について考察する。

封筒内の切り抜きのうち、『謎の処女峰』の姿態 世に出た「アンナプルナ」には、今から五十年も前に「ナゾの巨峰」アンナプルナの「中腹まで登った日本の宗教家」「河口慧海と

いう坊さん」への言及がある。これは昭和二十五年八月二十日「毎日新聞」朝刊三面掲載のものと判明した。「新西遊記」発表の三ヶ月ほど前の記事であり、直接の執筆動機となった可能性がある。

以下、前掲封筒に収められた切り抜きの中で「新西遊記」に撰取されたものについて考察する。まず、感冒をこじらせただけに見える「十二」「八」代の法皇が祈禱と治療の末逝去した話は、『西蔵旅行記』一〇五回と、ハワード W・ハガード「療法は百方尽せり されど王は死せり」「悪魔・医薬・医者」より抜萃（昭和二十一年十月「リーダーズ ダイジェスト」一卷五号八〇〇八一頁の切り抜き）に拠っている。後者の内容は、一六八五年二月、血が脳の動脈に詰まった（脳梗塞）か腎臓の疾患かで倒れた英国王チャールズ二世に対する十二名の医者の治療を解説したもの。約570cc瀉血した上、さらに肩から230グラム近い血を採るという「殺人的行為とでもいへるやうな処置の後、投薬が始まり、嘔吐剤や下剤、種々の植物等からなる緩下剤などで洗腸、さらに下剤が投与され、王の剃った頭皮に「発泡膏を貼」り、「噎粉」を与え、「鳩の糞」などを両足に塗り、再度採血と下剤による瀉下が続けられたが、「王の容態は少しも緩和しないのみか、却つて悪くなる一方」なので、「非常処置として」、「略」人間の脳のエキスや「ローレীর解毒薬」、山羊やカモシカなどの腹にある結石（胃石）が解毒剤として与えられたが効果が無く、医者の務めとして「細かいことにも手ぬかりがあつてはならないといふので、最も強力な強心剤が持ち込まれ」、「薬物の大蕩尽を行」った挙げ句、「ローレীর解毒薬と、真珠水剤とアンモニアとが、正に息絶えとしてゐた

王の喉へ、むりやりに注ぎ込まれた」とある（多く赤傍線が引かれている）。

脳梗塞ならチャールズ二世の死は避けられまいが、「新西遊記」ではこれを「感冒をこじらせて気管支炎喘息をおこしかけてゐるので、さしたる危険はなく「おこしかけてゐるくらゐのところ」で、手早く処置すれば、四、五日で快癒する程度の」法皇とすることで、「巧妙な方法で暗殺された」例としたのである。さらに、窓を開け放つて寒風を吹き込ませたり、呪文の合唱や濛々たる線香の煙を加えたりすることで、法皇を安眠させないようにしている。ただし、本作の薬剤は、「療法は百方尽せり されど王は死せり」と余り重ならない。このうち、落葉松茸（エブリコ）、金銀花（スヒカヅラ）、印度大麻草等は『薬用植物和漢名対照便覧』（昭和八年九月春陽堂）に見える。

第二は、「ルイ・ドルヴェーエ」「ルイ・ドルヴィル」の旅行記の引用前半部である。これは、吉田謙吉「蒙古草原の喇嘛廟と喇嘛踊り」（昭和二十三年二月「談話」一卷三号二八〇三三頁の切り抜き）とスウェン・ヘディン「雪のシベリア越境」（昭和十四年一月「世界知識」十二巻一号二九〇一三二頁の切り抜き）に拠っている。「新西遊記」での「光明の都、拉薩の危険なまでに美しい記述」のうち、「ゆくてにはやさしいなだらかな小山があるばかりであつた。」「略」大気は完全な均衡をたもち、人の気配はさらにない。締めつけけるやうな沈黙のなかで、自然が魔法にかかつたやうに四季のめぐりをとめてゐる。人間と季節に見捨てられた異様な眺望であつた。」「突兀たる岩山を背にした雪のやうに輝く白聖の大宮殿と仏殿と僧院の大群落が、乾燥した空気のせみか「空気の作用で」、無類の鮮か

さでクツキリと空のなかに「空のなかに」ナシ」浮きあがってゐる。」「曠原のフアンタジア。」「上り下りしてゐる無数の石階や石廊や「上り下りしてゐる」ナシ」とある部分は、「蒙古草原の喇嘛廟と喇嘛踊り」で、内モンゴル自治区中部、包頭から五当召（内モンゴル最大のラマ寺院がある）へ向かうような道筋に拠つたものである。

ゆくてには、やさしいなだらかな丘陵があるばかりであつた。晩秋ではあつたが、紅葉する樹立はなし、どんよりとした曇り空の下に草の色とはつきりと秋を思はせるものなく、寧ろ季節を失つた眺望であつた。「二八頁。すべて赤傍線が引かれている」

「略」

またその辺りからゆくての陵線が稍鋭くなり、道もゆるい上り勾配となつたが、その丘陵を越したあたりから、ゆくてはるかに五当召の白聖の喇嘛廟が、忽然と見え出したが、やがて見はるけき草原のただ中に、龍宮城のやうにその全貌をあらはしたのだった。盛り上つた丘陵を背に、さながら白聖の近代建築のやうに、乾燥した空気の故にくつきりと浮び上つてゐるのだつた。私は喇嘛廟に詣でる蒙古人達が、ひとしくうけるであらうかうした草原の中の、フアンタジアを想はずにゐられなかつた。しかも近づくにつれて、この喇嘛廟の建てられてゐる周囲の丘陵にだけ、松林が聳えたつてゐるのだつた。

廟の建物は、やはりそのゆるい丘陵の中腹のあたりの盆地に、悉く石灰で分厚く塗られた、長方形平面の直線的な建物の一群だが、本堂を中心に、丘陵の勾配に沿つて背後

に延び、その周囲に同じ白聖の僧房が、布石の如くぼつぽつと配されてゐる。

「略」

丘陵に沿つて、上り下りしてゐる階段や斜面の道は、その儘裏手の僧房の一劃へと続いてゐて、すでにして暮れかかつた丘陵の線がくつきりと、周囲をとりまいてゐた。「二八―二九頁。大部分赤傍線が引かれている」

また「雪のシベリア越境」には、「殺人的な寒気」の支配する人気の無い夕刻の雪原を「吾々はここに支配してゐる殆んど締め付けられるやうな沈黙の裡に、荒野の神秘を感じるのである。空気は完全に均衡がとれてゐて、松樹の針葉一つ動かさない。全自然が魔法にかゝつたやうであり、」（一三二頁。当該段落前後を赤鉛筆で四角に囲む）としている。

以上の傍線・破線部が対応している（波線部については後述）上、全体の雰囲気もこれに近い。内モンゴルの草原と丘陵に建つ白聖の喇嘛廟や、人気の無いキャフタ（バイカル湖の南、モンゴル国境近くにあるロシアの都市）近辺の雪原を、拉薩のポタラ宮に重ねた点に「新西遊記」独自の工夫があつた。

なお、「新西遊記」で「曠原のフアンタジア」に続く「その蜃気楼を一瞥したときのおどろき」云々は、田中英光『オリンポスの果実』（昭和十五年九月「文学界」、同年十一月高山書院。以下、昭和二十一年十一月鎌倉文庫『青春の書』3 オリンポスの果実』による）12で、船上から「夢のやうな美しさ」（九六頁）のサンフランシスコを眺めた主人公が「白い国！ 蜃気楼もかくや、」（九七頁）と感動するのと類似する。また、「新西遊記」の前掲「突兀たる岩山を背にした雪のやうに輝く白聖の

大宮殿」(ボタラ宮)が「クツキリと空のなかに」浮き上がっているさまは、直接には「蒙古草原の 喇嘛廟と喇嘛踊り」に拠ったにせよ、『オリンポスの果実』12で「背後には、青空をくつきりと劃した、峰々の紫紺の山肌、手前には、油のやうにとろりと静かな港の水、その間に、整然とたち並んだ、白いビルディング」(同)と類似した構図である。『オリンポスの果実』13に登場する「朴拳闘選手」(九九頁)も、「猪鹿蝶」(昭和二十六年三月「別冊文芸春秋」、ノチ「姦」[昭和三十年十月新潮社『母子像』所収])で言及される「朴なんとかいふ」(「朴とかいふ」ボクサーくづれ)と類似しており、参照された可能性がある。

第三、「アフリカ大陸の暗黒地帯」トンブクツツの話は、前述の封筒以外の旧蔵資料中に見つかった。ローラ・シー・ブルトン「仏領西アフリカ横断記」(昭和十六年七月「世界知識」十四巻七号一〇二〜一〇七頁の切り抜き)で、「現在フランス政府がこの町「チムブクツツ」をトムブクツツと公式に名づけてゐる」(一〇二頁)その町に関する記述である。「新西遊記」で、「サハラ砂漠の中央に「に」ナシ」、黒人国イスラム王国の文化の中心になつてゐるトンブウクツツ Tonbouctou 「Tonbouctou」ナシ」といふ学問の都があつて、そのサンコレ大学にギリシヤ、ラテンの詩文の写本やアラビア語の古典が集つてゐるといはれ、回教の大学生がトンブウクツツの黄金の富を鷲鳥のペンでトルコ王に書き送つたなどと「書き送つた」といふ伴りの記述があるが、は、「仏領西アフリカ横断記」の「嘗ての黒人帝国の首都」の章に拠る。すなわち、

チムブクツツ、沙漠の真中のこの町が、かつては学問の町

であつた。

十五世紀から十七世紀にかけてのこの町の学問の都としての名声は、ここに保存されてある写本により、ラテン、ギリシヤの古典の蒐集も可能である」といはれるがらゐる四方に響いてゐたものである。北アフリカの大半を占めてゐた黒人国イスラム帝国の文化の中心地となつてゐた。学問に志すものはみなこの「サンコレ大学」に学び、諸国の写本も研究と比較のため持つてきたのであつた。当時は殆んどすべてのアラビア語の古典がチムブクツツに集つて来た。

〔略〕

回教徒の学生達は自分達の黄金の富を鷲鳥のペンで書き、かのフランスのルイ十四世が遠征を試みたほどに、この町の繁栄を世界に喧伝した。〔一〇六頁〕

とある。ただし、以上の情報は「伝説の、広くして富めるチムブクツツの幻影」(一〇七頁)とされるように、虚構性の高いものであつた。

「新西遊記」では、ラッサの大学にこそ、サンコレ大学のように東西の古い經典が残つてゐるとされる。学生は、

中亜梵語のブラーフミーや、ゾクト語やウイーグル語などの死語で仏典や經論の研究をしてゐる。大仏殿の經藏には、七世紀のはじめに北京で「北京で」ナシ」版行した西藏語訳のカンジュール(一切經)をはじめ、六朝唐代の石摺の經本(唐拓)、祇經(拜火教の經典)、摩尼教の教本、量「景」教(ネストリアンといふキリスト教の一派)の經本、ザラシトラ教の經本など、千年も前に消滅してしまつた

世界宗教の經典が原本のままで残つてゐる」「「ナシ」

これは、前掲封筒に収められた松岡讓「石室ひらく」（昭和二十四年六月「天馬」一卷五号一四〜二九頁の切り抜き。目次では「探検小説」と角書）に拠つてゐる。「石室ひらく」には、敦煌の千仏洞が一時「一大仏教大学の觀を呈し」（二二頁）たこと、古文書には「西蔵文」「梵語」のほか、「一風変はつた世にも珍らしい中亜梵語のブラーフミーが出て来る、梵語の俗語ブラクリットが出て来る、ギリシヤ語が出て来る、ラテン語が出て来る、はてはペルシヤ語、トルコ語、シリヤ語、蒙古語などから、「略」。その中の一つは「略」多分ゾクト語ウイグル語であらうと思はれるし、「略」ともかくこれらの文字は所謂死語で、一（二六頁）、「最初仏教の經典ばかりかと思つて居たところが祇經即ち拝火教の經典がある、摩尼教の經典がある、量教即ちキリスト教の一派ネストリアンの經典がある、」「略」。ザラツシトラ教一つをのぞいた世界宗教の經典は頗く見本があるといつてもいゝ位だ。」「六朝唐代の石摺りが幾つも出て来る。つまり唐拓だが、」（二七頁、多く赤傍線が引かれている）などとする。敦煌千仏洞に千年以上も前の上記文献が眠つていたという「小説」「石室ひらく」の設定を、「ザラツシトラ教」も含めて十九世紀のラツサに転用することで、本作はさらに虚構性を高めたのである。

その後、「世界地図の「白い部分」は、両極は別にして、人間の住む地域では、アフリカのイスラム王国と西蔵といふことになつてゐた「なつた」。」云々は、前掲封筒中の竹節作太「処女峰ナンダ・コットに挑む」（昭和二十四年七月「天馬」一卷六号八〜八七頁の切り抜き）の「南北両極地や大洋の深海さ

え探検され尽してゐる現在ヒマラヤのみは空白地帯となつてゐる。」（八二頁）と、『西蔵遊記』二編一章一の「阿弗利加も、中央亜細亜も殆ど探險し尽され、「略」独り西蔵のみは「略」今尚太古に等しい未開の状態に放置せられ」を取り合わせて強調したものであらう。

次の「イスラム王国のはうは、一八二七年（文政十年）にルネ・カイエといふフランス人がトンブウクツを見て「見」、生きてそこから出てきた最初の欧羅巴人としてフランスへ凱旋した」は、前掲「仏領西アフリカ横断記」の「嘗ての黒人帝国の首都」前引部に続く、

十九世紀初頭にルネ・カイエと呼ぶフランス人がここで二ヶ月程生活してゐる。彼はすつかりムーア人に変装してゐたのであつた。生きて歸つた白人はこの男が最初である。

（一〇六頁）

に拠る。なお、「新西遊記」がルネ・カイエの潜入した年を「一八二七年（文政十年）」とするのは創作であらう。「仏領西アフリカ横断記」で、その次に記述されるゴードン・レーシング特務曹長は、英国から「一八二五年」に送り込まれたが「これも一年足らずで殺され」たとある。カイエとレーシングの記述順から見て、カイエ潜入が一八二七年とは考えにくい。「回教徒達のメッカであり、伝統的に異教徒に犯されることを許さなかつた」（同一〇七頁）「チムブクツ」がラサの状況と類似するため、この「仏領西アフリカ横断記」が利用されたのであらう。

第四、山口智海の西蔵潜入を語る後半で、智海は「光緒二年（一八七六）到北京で出版された天主教教会の神父有向の「韃靼旅行雜写」（アッベ・ユックの「「の」ナシ」」「韃靼公路」

「韃靼古道」Abbé Huc, Haute voie de Tartareの漢訳」などによって入蔵を企てる。「韃靼公路」(「韃靼古道」)「韃靼旅行雜写」の存在は確認できないが、これは前掲封筒中のアベ・ユック「韃靼見聞記」(昭和二十四年三月「カトリック ダイジェスト」二巻三号六九〜七八頁の切り抜き)に拠ろう(一部に赤傍線とペンによる抹消あり)。その末尾に(筆者 Abbé Huc／著書 High Road in Tartary より要約)とあり、「新西遊記」の「Haute voie de Tartare」はそのフランス語訳と考えられる。High Roadは「主要道路」「本街道」、Hauteは「高い」または「古く」、voieは「道」の意。この「韃靼見聞記」は、『韃靼・西藏・支那旅行記」上下(上巻後藤富男・下巻川上芳信訳、昭和十四年六月・九月生活社)の内容ともよく一部重なっている。

第五、智海が「氷河が溶けだした滾りたつ激流をいくつか泳ぎわたり、漂石(氷河が押し出した堆石)ばかり落々たる海拔一万六千尺、全長、六百里の不毛の高原(泳ぎわたり、海拔一万六千尺の漂石(氷河が押し出した堆石)の高原)で形容を越えた苦難に苛まれ」たというのは、前掲封筒に収められたジェームズ ラムゼー アルマン「エヴェレスト征服の闘ひ」(昭和二十一年九月「リーダーズ ダイジェスト」一卷四号五一〜五八頁の切り抜き)の「溶けた氷河の滾りたつ激流、漂石の散らばつた渺茫たる平原、」(五二頁、赤傍線引く)に拠つていよう。標高は、『西藏旅行記」三二回にマナサルワ湖の海拔が「一万五千五百尺以上」とある。

第六、智海が引き合いに出した、十七年かかってお経を持ち帰った玄奘三蔵の話は、前掲「石室ひらく」に「玄奘三蔵があの前後十七年間の印度旅行に」(一九頁、赤傍線引く)云々に

拠ろう。また、「甘珠爾(勅命訳一切経)は「経」ではなくて「仏」であり、「甘珠爾は甘肅省敦煌の雷音寺(千仏洞)の経窟におさめられてゐるが、毎年、五月初めの灌仏会大法要には「には、一切経を拝むために」、青海のツアイダン王や甘肅新疆の端郡王までが、一切経を拝むためにはるばる「までが、はるばる」敦煌まで出かけて行く」というのも、「石室ひらく」に拠る。すなわち、「新疆省」ウラムチにいる「清朝の王族端郡王」(一四頁)が、「甘肅省の敦煌の千仏洞」(一六頁)「雷音寺」(二〇頁)に「西藏版の一切経」(一七頁)があるので「拝んで来ました」(同)とペリオと語り合う場面や、千仏洞を管理する道士がペリオに「毎年五月初めのこの灌仏会の年一度の大法要になりますとな、近所近在は愚か、遠く青海省のツアイダムあたりから王様までが御参詣になるのですわ。其時宝庫の中にあるチベットの有難い一切経をお拝みになるのですしてな、」(二四頁、一部赤傍線が引かれている)と語る場面を用いている。

第七は、智海が「グンパールといふ僧院」に入つて西藏語を学んだ際の挿話である。「グンパールは黄教ラマの僧院で、丘陵の斜面に「丘陵の思ひ思ひのところに」石灰を塗つた方形の僧房が思ひ思ひのところに「僧房が」建つてゐた。石門の前の草原に黄の衣を着たラマ僧が五人ばかり、しやがむともつかず坐るともつかぬ恰好でちつとして「恰好でうづくまつて」ゐる。なんだと思つたら、「なんだと思つたらそれは」排便中のポーズなのであつた。」は、「蒙古草原の 喇嘛廟と喇嘛踊り」に拠る。すなわち、前掲第二に波線で示した「廟の建物は、「略」悉く石灰で分厚く塗られた、長方形平面の直線的な建物の一群

だが、「(二九頁、赤傍線が引かれる)や、「丘陵にかこまれて、四角な独立した僧房が思ひおもひの向き向きに点在してあて、その間を、燕脂色の僧衣の喇嘛僧が「略」見下ろせるのだつたが、草原の中に、三々伍々しやがむともつかず座るともつかぬ恰好で、ちつとしてゐる喇嘛僧が見える。これは排便中のポーズだったのだ。」(三〇頁、大部分赤傍線が引かれる)とあるのを用いている。

第八は、西藏人の服装の説明である。長い袖が「食器を拭く雑巾の役もする。」というのは、「蒙古草原の喇嘛廟と喇嘛踊り」で、「蒙古服の長い袖は、「略」先づその腕を一撫でして拭くのさうだが、「(三〇頁)に拠ろう。」

第九は、ドーラギリ越えについてである。本作では「五月までは吹雪で通れず、六月の末からは雪が軟くなつてこれまた通れなくなる。」七月末には雪が降り出すため、越えられるのは「五月中旬から六月末までのわづか」まで、一年のうちわづか「四週間だけ」という。これは、『西藏旅行記』一四回で六、八月の三ヶ月しか越えられないとする記事を誇張したもののだが、実際に踏まえられたのは前掲「エヴェレスト征服の闘ひ」であった。すなわち、「エヴェレストへ登れるのは、僅か六週間の短期間だけである。五月の初めまでは、山の全地域一帯は、吹雪に狂ふ冬で、全く閉ぢこめられてゐる。そして、六月の半ばすぎは、インドの季節風のために、「略」雪と霰と、解けかゝるどろどろの水とで死の罌と化するからである。」(五四頁、「僅か六週間の短期間」に赤傍線引く)とある。

智海のドーラギリ越えは、『西藏旅行記』一六回以下の記述に基づく。高山ゆえの呼吸困難等は一六回の「雪山の峻坂を攀

ぢ登る」にも見えるが、「新西遊記」が主に基づいたのは前掲「エヴェレスト征服の闘ひ」であり、下記の対応個所のほとんどに赤傍線が引かれている。すなわち、「新西遊記」で

越えるはずの東の雪鞍はなほ半里ほどの高さで見あげるやうな上に「やうなところに」聳えてゐる。「略」ちよつと身体を動かしても肺が膨れ、心臓の鼓動があげれだす「心臓が口からとびだしさうになる」。雪を含んだ烈風が真向に吹きおろすので「吹きおろし」、睫毛に雪花ができてひとりでに眼が「雪花がついて眼が」ふさがつてしまふ。耳蔽のついた帽子「帽子の耳蔽」のなかで呼吸が凍つて堅い「堅い」ナシ」氷殻ができ、それが針のやうに頬を突刺す。

とある前半は、「ちよつと体を動かしても、肺は膨れあがり、心臓の鼓動は激しくなつた。山はなほ垂直二マイルの高さで、彼等の頭上の空中に聳えてゐた。そして、風と雪は、猛り狂ふ颶風の烈しさで頂上から吹きおろしてゐた。」(五三頁)に拠る。後半は、前掲ヘーデン「雪のシベリア越境」の「私の下睫毛に小さな雪花が引懸つてゐて非常に邪魔になつた。「略」北京で買った耳蓋のついた支那式の毛皮帽「略」も長く助けにならなかつた。呼吸が頸巻の中で凍り、頸巻の上には次第に堅い氷殻が張つた。」(一一〇頁)に拠る。

また、「鉛のやうに重い足をひきずりながら」(「新西遊記」)は、「鉛のやうに重い脚を曳きずり、」(「エヴェレスト征服の闘ひ」五六頁)に拠つていよう。

「凍つた薄い空氣にやられ、山に馴れたテンバまでが咳きこみだした。」(「新西遊記」)も、「稀薄な凍つた空氣に、咳入り

且つ喘いだ。」(同五七頁)に拠っている。

「空気に飢えて」「飢ゑ、」いまにも窒息せんばかり。一步ごとに四つから十ぐらゐ呼吸し、ものの五歩も歩くと、停つて「歩けば、いちど停つて」休まないで心臓が破裂しさうになる。ものを考へる力も判断する力もなくなつて、夢現のまま機械のやうにのぼつてゐると、」(「新西遊記」)も、「空気に飢えて窒息するばかりであつた——」(五六頁)「動いてゐるときは、一步ごとに、四つから十ぐらゐの呼吸をしなければならぬ。」(五七頁)「頭と心臓は、」(略)今にも文字どほり破裂しさうである。」(同)「酸素の欠乏で精神も感覚も駄目になつてしまつた。野心も判断力も意志も消え失せた。そして、放心した者のやうに、たゞ機械的に前進した」(五四頁)に拠っている。

「手足が痺れて岩についたまま動かなくなつた。ひとりでに口が開いて下唇がダラリと垂れさがり、眼にはいるものがみな二重に見えて焦点が合はない。すぐ上にザラメ雪の切通しが招くやうに光つてゐるが、体力が尽きはてて上るも下るもできないことになつた。」(略)手を離せば一万尺の下へ逆落しである。

「略」智海は岩の出つばりに力なくしがみつきながら、これでもう万事休したと、心をきめて」(「新西遊記」)も、「こゝで万策尽き果てた。体も頭も痺れて、手足は動かなくなつて、眼の焦点が今「合」の誤植か」はなくなつた。」(同五五頁)「手も足も痺れ、口は大きく開いて垂れさがり、」(五四頁)「物が二重に見え出し、」(五七頁)「さらめ雪に蔽はれた谷へ出た。一つ足を這らせば、一万フィートのロンバック氷河へ真つ逆に墜ちる。」「略」向ふ側の出つ張りに力なくしがみつきながらもはや万事休すと思つた。」(五七頁)に拠っている。

本作の工夫は、世界最高峰のエヴェレスト(八八四八メートル)登山を用いて、ドーラギリ(八一六七メートルの)越えの苦難を強調した点にあつた。なお、以上の対応関係から見て、智海の「大きな子供ぐらゐにしか見えない貧相な沙弥の顔」は、「エヴェレスト征服の闘ひ」のマロリーの「ほつそりとした痩せ型で、子供ぢみた顔をした」(五二頁)形象を受け継いだ可能性が高い。「燃えるが如き精神を持つ」(同)マロリーにとつて、エヴェレスト登山が「肉体よりも精神の冒険で、熱烈な信仰のやうなものであつた。」(同)点も、智海が西藏大蔵經を持ち帰ろうとした強い信仰に重なる(ただし、この個所に傍線なし)。

第十、「新西遊記」で語られたラッサ市内の町筋の汚穢・泥濘は『西藏旅行記』九〇回に見えるが、「糞尿が流れ、泥濘は膝を没するばかり。」に当たる描写は見えない。これは、前述ユック「韃靼見聞記」の「車道はどろどろで汚物が溢れ、泥濘膝を没するばかり、」(七〇頁、傍線引く)に拠つていよう。

第十一、和堂が「石扉」「石の扉」を開けて智海を導いた部屋は、「石室ひらく」の千仏洞の石室のイメージであらう。「新西遊記」で、「眼が暗さに馴れるにつれ、五十畳敷ほどもあらう「あらうか」と思はれるほの暗い石室の三方の壁の書棚に、黄ばんだ帙と朱塗の軸に古代の薄明を見せる経本と経巻が、「書棚に、経本と経巻が、黄ばんだ帙と朱塗の軸に古代の薄明を見せて」ギッシリと天井まで「ギッシリと」「ナシ」積みあげられてゐる。」「十巻づつ勅訳の墨印「黒印」を捺した白布「青い布」に包んで、智海は「陶然と法悦にひたりこんで、」「十畳よりはやや狭い、窓一つだけある薄暗い部屋のはまりの壁に



沿つて、何千束とも知れぬ麻紙が膨大な量で「に」積みあがられ、「古代穀紙の二間半ほどの長さのもの」「横長の古代穀紙」などとあるは、「石室ひろく」の次の個所に拠っている。すなわち、「目が暗さになれるにつれて、その八畳敷位もあらうと思はれる密室の中には、天井まで届く程古文書の堆き山又山が灰灰と見えて来た。ペリオは思はず歓声をあげて」「二五頁、多く赤傍線が引かれる」、「経巻は十本位づゝ一束にくゝられて、多くは風呂敷様の布切れに包まれてゐるのだが、「略」こゝの古寺の墨印がスタンプされて居る」「穀紙や麻紙のゴワ／＼の古代経巻」「二六頁」などある。

以上のように、久生十蘭は西蔵関係以外の文献も積極的に援用し、本作中に嵌め込むことによって、虚構の西蔵像を作り上げたのである。

もちろん、「新西遊記」で使われたのは上記切り抜き資料だけではなかった。ここで新たに、福島中佐のシベリア単騎旅行を扱った寺島樞史『馬蹄一万五千料』（昭和十八年七月青葉書房）「二、四人の旅行家」を追補したい。

「新西遊記」冒頭近くで語り手は、岡本監輔・福島中佐・郡司大尉・野中至夫妻ら「進んで国家的な事業に身を捧げようといふ受難者型の日本人」「受難者型のタイプ」から、特に玉井喜作と山口智海の行動を取り上げている。

ただし初出では、その前に「片岡侍従の千島差遣」が言及されていた。これは、『馬蹄一万五千料』で、ロシアの東方政策に注意していた明治天皇が「千島探討ノ事」という「御沙汰」を示し、「明治二十三年に、片岡利和侍従を、とほく占守島に

御差遣にな」った（十二頁）話に拠ったものである。「御沙汰」本文について、『馬蹄一万五千料』と「新西遊記」の間には、「朕」↓削除、「之方任」↓「ソノ任」、「唯利和」↓「汝 利和」、「朕実二」↓削除、「汝能ク」↓「汝」など軽微な異同（一字空きや読点の異同を除く）があるが、これは久生十蘭による改変であろう。

続いて「新西遊記」初出では、「明治天皇からかういふ御沙汰を受けると、風にも耐えぬ大宮人の片岡利和は、とるものもとありあへず千島へ行つて占守島で冬籠りをし、随員、多羅尾忠郎の「千島探検実記」を上書したが、侍従の千島差遣が国民を感動させたことは非常なもので」とある。これも『馬蹄一万五千料』で、続く「これが、片岡侍従に賜った御沙汰であつた。片岡侍従は、御沙汰を拝するや感激し、直に千島に赴き、占守島に冬籠りし、詳にその状況を探り、随行員多羅尾忠郎をして『千島探検実記』を書かせ、これを上書した。／＼片岡侍従の千島御差遣が、わが四千万国民を感動せしめたのはいふまでもなく、」（十二頁）に拠っている。「新西遊記」定稿で片岡侍従の話を削ったのは、くどくなるのを避けたためであろう。

「新西遊記」定稿は、「岡本監輔の千島義会の結成」「福島中佐のシベリア騎馬横断、郡司大尉の千島探検、野中至夫妻の富士山頂の氣象観測」を挙げる。『馬蹄一万五千料』では「岡本監輔が千島義会を興し、郡司成忠が報効義会を組織し、千島へ移住を試みた等はその一例である。」（十二頁）とあるだけだが、本書の主眼は福島中佐のシベリア単騎旅行だったから、「新西遊記」でこれを加えたのは当然であろう。しかし、野中至夫妻の富士山頂の氣象観測（明治二十八年）は『馬蹄一万五千料』

に言及がなく、別途参照されたとと思われる。

また、「新西遊記」の「玉井喜作は山口県三井村出身といふほか、すこしも経歴が「ほか、経歴はなにひとつ」知られてゐない。」も、『馬蹄一万五千杆』の「玉井喜作は、山口県三井村の出身であるといふだけで、その経歴はわからぬし、」(十五頁)に拠る。

さらに、「新西遊記」で、玉井が郡司大尉の出発から十ヶ月遅れ、「福島中佐が単騎旅行を終へようとする明治廿六年の十二月、イルクーツクでロシア人の茶の隊商に加はり、福島中佐と逆コースをとつてシベリア徒歩横断の旅行にのぼつた。」「玉井喜作は最後まで隊商から離れず、歌にもうたへないやうな一万五千杆の旅行をつづけ、翌々、廿八年の二月に独逸へ入り、ベルリンで *Karawanen-Reise in Siblien* (「西比亜〔西比利亜〕征槎旅行」)といふ本を刊行した。イルクーツクからトムスクまでの千八百杆の見事な素描は、」云々とあるのは、『馬蹄一万五千杆』の以下の部分を取り合わせたものだろう。すなわち、「明治二十五年十一月、下関から船で朝鮮に渡り、ウラジオストツクに行き、」[略]「あくる二十六年の暮、福島中佐が単騎旅行を終り、郡司大尉が占守の越年生活に入つたころ、イルクーツクを出発し、明治二十七年二月六日、一万五千キロの横断旅行を終つたのだが、このあひだ、あるときは徒歩で、あるときは馬車を駆り、あるときは橇に乗り、あるときは舟便を求め、寒気と、饑餓と、絶望の長旅は続けられた」(十六頁)、「單身支那茶の隊商に加はつて、福島中佐とは逆コースをとり、ウラジオストツクから、ベルリンまでの一万五千キロを、一年半の日子を費して踏破した」(十五頁)、「中佐が、」[略]「明治二十六

年六月十二日、長途の単騎旅行を終つたころ、漂浪の旅人玉井喜作は、その逆コースを、なほも困難な旅を続けてゐたし、」(二十頁)、「西暦一八九八年(明治三十一年)に、ドイツの首都ベルリンで『西比利亜征槎紀行』(*Karawanen-Reise in Siblien*)といふ書物が刊行された。」(十五頁)、「彼の著書『西比利亜征槎紀行』は、この一年半に近い困難な長旅のうち、もつともロマンチックで変化に富み、辛苦を嘗めたイルクーツクからトムスクまでの、千八百キロを三十日間で踏破した日誌をあつめたもので、」(十六頁)、「茶をわかつことはロシア人の習性上、」[略]「最も大切な仕事なのである。」(十九頁)などである。相違する傍線部分のうち、明治二十八年二月着としたのは、二十六年暮から数えて一年半近くとしたためだろうが、二十五年十一月から数えるべきであつたし、「紀行」を「旅行」、*Siblien*を *Siblien*としたのも誤記であろうか。しかし、実際には馬車や橇・舟を利用したのに、徒歩だけの横断と改めたのは、玉井の旅の苛酷さを強調するためであろう。

加えて、「新西遊記」の玉井が「その本の序文で、」汽船の船室に閉ぢこもつて欧羅巴へ行くのは月並だから、わざとかういふ道をえらんだまで」などと「まで」といつてゐるが、「も、『馬蹄一万五千杆』の「彼は、その書物の序文のうちで、『汽船の船室に閉ぢこもつて、ヨーロッパへ行くのはつまらぬから』とて、シベリア横断の道を選んだことを述べてゐるが、」(十五頁)に拠っている。本書の邦訳『世界ノンフィクション全集』47(昭和三十八年十月筑摩書房)所収『シベリア隊商紀行』(小林健祐訳)によれば、この部分は

だが、インド經由やアメリカ經由の平凡な道はとらなかつ

た。今日よく利用されている、客間つきの快適な汽船には乗らなかった。初めから終わりまで一人で、旅の目的地、ヨーロッパの中心であるベルリンをはっきり念頭におきながら、シベリアとロシアを経由して旅行したのである。

であった。久生十蘭が原文に拠っていないことは明らかである。実際「新西遊記」では、シベリア經由の茶の隊商の旅行について、寒気や飢饉のほか、「ブルガ（暴風雪）、狼群、流賊との戦争、ペスト、」などあらゆる災厄を伴ったとし、また四百五十名からなる隊商一行の人数がポーランド国境に着いたときには三分の一になっていたとし、本書が「独逸地理学協会の紀行文庫へ収録された」などとしているが、『シベリア隊商紀行』にこうした記述は見えない。なお、『馬蹄一万五千軒』十七頁で言及された加納一郎「玉井喜作のシベリア紀行」（昭和十六年二月「北方研究」4）によれば、橇は二二五台、馬は二四〇頭、馭者は四十五人である。

## 二、「湖畔」——『現代日本文学全集』『明治開化期文学集』ほか——

「湖畔」は昭和十二年五月「文芸」に発表され、のち昭和二十七年四月「オール読物」に直木賞受賞第一作として再掲載（以下「再掲」と略）、さらに『うすゆき抄』（前掲）に収録された（定稿）。以下では、「湖畔」中の字句や奥平の経歴について、『現代日本文学全集』第一篇「明治開化期文学集」（昭和六年一月改造社）に拠ったことなどを追補したい。

まず本作冒頭部に、「惟ふに俺の「いづれ貴様も諒解するこ

とと思ふが、俺の」四十年の人生は宛も旧道徳と封建思想の圏内を彷徨するイルンショー製「クロノメートル」の指針の如きもので」とある。この「イルンショー製「クロノメートル」」は、ヴェルヌ原著・川島忠之助訳（新八十日間世界一周）第二回（元版前編は明治十一年六月発行）で、パスパルツが主人フレッジの人となり（あたか）を「恰モルロイ或ハイルンショー精製「クロノメートル」ニ似タリ」（明治開化期文学集）四〇頁。引用文の傍線ママ）と喩えるのに拠つていよう。「クロノメートル」は精密な懐中時計、「イルンショー」（Earnshaw, 1749-1829）は高名な時計職人の名である（新日本古典文学大系明治編15「翻訳小説集 二」脚注、二〇〇二年一月岩波書店）。性格や人生をクロノメートルに喩えている点も共通する。

次に主人公奥平の経歴について。奥平は、英国の「ウオール「ウォール」ミンスターのグランマー、スクールに入り、その後龍動「ロンドン倫敦」のユニヴァーシティー、カレッジ「カレッジ」の法科に入った「へ移つた」という。これも前掲「明治開化期文学集」巻末「諸家年譜」「馬場辰猪」中、明治四年「三月ウオールミンスターのグランマー・スクールに入る。／八月倫敦ユニヴァーシティー、カレッジの理科に入る。」（六〇三頁）を下敷きにしてゐる。さらに、同慶応二年（一八六六）の項には、馬場が「福沢諭吉の奥平邸の塾に入る。」、同「諸家年譜」「福沢諭吉」（五九八〜五九九頁）にも、福沢が天保五年（一八三四）「中津奥平藩倉屋敷に生る。」とある。この「奥平藩」とは、豊前国中津藩（十萬石）のことである。さらに、安政元年（一八五四）「同藩奥平老岐をたより、安政五年「鉄砲洲奥平中屋敷にて」などともある。「湖畔」の「奥平」の名はこれらに基

づくだろう。また、本作で「文久元年幕府の「文久元年の」遣欧使節に加つて渡欧した」奥平の父の経歴は、福沢が「文久元年「一八六一」幕府の遣欧使節の一行に加はり「略」仏、英、蘭、普、露、ポルトガルの諸国を歴遊」したのに拠つていよう（竹内下野守を正使とする遣欧使節の一行中に「奥平」姓はいない）。「湖畔」の奥平が「時事新報」に論文を投じたのも、同「福沢諭吉」年譜の「明治十五年「時事新報」創刊。」に因むだろう。

第三に、陶を殺し損ねた奥平がボートで湖上を漕ぎ渡る場面の叙景、「十日月は「が」涓々と湖上に照り、」の「涓々」も、前掲「明治開化期文学集」所収の東海散士「佳人之奇遇」巻十二（元版は明治三十年七月博文堂）に拠つていよう。作中の石版刷挿画（二七五頁）に「懷君半夜未成眠明月涓涓水一天」云々の詩句が見え、同頁本文中にもこの詩句がある。「涓々」は水がちよろちよると流れるさまであり、月光の清く明るいさまなら「娟々」が相応しいが、この誤用は『佳人之奇遇』に依拠したためだろう。なお、高木が「貴府大学」で免状を取ったという「状師」（代言人・弁護士の意）も、「明治開化期文学集」所収の「緑叢談」（元版明治十九年十月）中に複数用例が見える（三九〇頁など）。

拙稿「恋愛小説としての『湖畔』——久生十蘭論Ⅰ——」（一九九三年一月世界思想社『女と愛と文学』所収）では、『佳人之奇遇』や成島柳北『柳橋新誌』との関連について『現代日本文学全集』『明治開化期文学集』を参照していたが、久生十蘭は確かにこれを用いていたのである。

さて、「湖畔」の奥平は「慶応二年「慶応二年正月」、奥平正

高の継嗣として長坂、松山城内「長坂松山城内」で出生した「生れた。」とされ、陶と出会った明治三十五年（一九〇二）には伯爵であつた。前述福沢諭吉の生まれた中津奥平藩藩主は、「明治二年に至り、華族に列し伯爵を授けられた。」（平凡社『大百科事典』第四卷「昭和七年三月、新装版昭和十二年三月」「奥平氏」。慶応二年当時の藩主は奥平昌服、明治二年は昌邁である（東京大学史料編纂所編『読史備要』「昭和八年七月内外書籍株式会社」「大名一覽」「四九二頁」、前掲『大百科事典』「奥平氏」、橋本博編『大武鑑』十一「昭和十一年十月大治社」慶応二年「奥平大膳大夫」「八頁」。『奥平正高』に類似した名は、文化十年「一八一三」の藩主「奥平昌高」（『読史備要』四九二頁）で、この名は『大百科事典』「奥平氏」の系図にも見える。伯爵という爵位的一致、正高・昌高という名の類似から、久生十蘭は上記のような文献を参照したと考えられる。「湖畔」の奥平に近いのは、前述の昌邁（安政二年〜明治十七年「昭和十九年九月新人物往来社『日本史総覧』V、九七頁」の子昌恭（『大百科事典』「奥平氏」）だが、本作の奥平とは生年も経歴も一致しない。昌恭は明治十年生まれ、明治十八年家督相続し伯爵を襲爵。明治四十二年欧米を漫遊、のち貴族院議員となり、実業界で活動、銃猟投網等が趣味（以上、昭和十二年三月人事興信所『第十一版 人事興信録』オ三三〇頁）。昭和十八年十月の第十四版にも記載があるが、昭和二十三年九月の第十五版には見えない。昌恭は昭和二十三年五月没（『新修華族家系大成』上、昭和五十七年三月霞会館）。華族制度の存続している昭和十二年に発表された「湖畔」では、奥平家への慮慮から、あえて経歴をぼかしたことが考えられる。

陶は、奥平と出会った明治三十五年初夏に桜井女学校の四年だったという。桜井女学校は、桜井ちかが明治九年に創立し、矢嶋樺子が校長代理を務めた女学校を指すのかも知れないが、明治二十三年に新栄女学校と合併し、女子学院と校名を変更したため、歴史的に見て適切ではない。

明治三十六年九月、日露開戦が避けられないと考えた奥平は、名声を博そうと「広野」「再掲」「広野」、定稿「河野」等の対露同志会」と呼応し、開戦論を唱えた。対露同志会とは、明治三十六年八月九日神鞭知常らを中心に結成された対外硬団体で、対露強硬を唱え開戦論を主張した。会長近衛篤磨、会員佐々友房・頭山満・小川平吉・柴四朗ら。単行本の「河野」は河野広中らしい（初出・再掲「広野」は「河野広中」からの誤記または意図的な改変か）。『東亜先覚志士記伝』上（昭和八年十二月黒龍会出版部、昭和十年八月三版「四九 対露同志会の奮起」等に、明治三十六年の対露同志会結成、頭山満と河野広中からの活動が概観されている。明治三十八年九月五日、日露戦争講和条約（ポーツマス条約）に反対する対露同志会などが日比谷公園で国民大会を開催した際、河野は座長として講和条約破棄決議などを採択したが、民衆は警官隊と衝突して暴徒化し、各所を襲う日比谷焼打ち事件となった（同書「六〇 日露講和条約反対運動」）。しかし、「湖畔」の明治三十六年段階で河野を対露同志会の筆頭に挙げるのは違和感がある。

姦通した陶を殺害した奥平は、精神鑑定の結果「残欠性治癒」「残欠治癒」と鑑定され、「責任無能者」として「不論罪」の判決を受け出獄する。本作冒頭部の「Defektheitung（\*残欠性治癒）」のスペルは「Defektheitung」が正し。例えば、神田

豊穂『現代医学大辞典』23「精神病学科学篇」（昭和五年四月春秋社）に「残欠性治癒」略「Defektheitung」／「欠陥治癒」の項を見よ。（六六頁）、「欠陥治癒」略「Defektheitung」／「欠陥治癒」とは強劇重難な精神障礙は去つたが精神生活は十分完備したとはいへず、まだ多少の欠陥が残つてゐるものをいふのである。症状は一般に減退して感情は沈静にて均同になり、妄覚、妄想は次第に消滅して来るが、精神の作能力及び抵抗力はまだ減弱して居て、所謂精神薄弱は多少著明になつて居る。（四四頁）云々とある。ただし、呉秀三『精神病学集要 前編』（大正五年三月第二版吐鳳堂書店、初版明治二十七年九月）一一八頁や三宅鉦一・松本高三郎『精神病学診断及治療学 上』（明治四十三年一月増訂再版、南光堂書店）四四五頁には「残欠性治癒 Defektheitung」の例があり、これらを参照したことが考えられる。

### 三、「白雪姫」——「屍体を運ぶ氷河」「夜の鶯」——

「白雪姫」（昭和二十六年七月「オール読物」、ノチ昭和三十年十月新潮社『母子像』所収）に関して、フランク・イリングワース「屍体を運ぶ氷河」（昭和二十五年三月「カトリックダイジェスト」）を追補したい。

「白雪姫」末尾で「ハナが天然の氷室に包蔵されたまま、[さて] 幻想的な旅行をはじめた」という発想は、「屍体を運ぶ氷河」で、一八六五年マッターホルン初登頂後に墜落死したフランシス・ダグラス卿が氷河に運ばれて「長い旅行をした」とか、雪崩で氷河に引きずり込まれたヘンリー・アークライト大

尉の「氷の下の旅行がはじまつた」などと類似する。また、本作末尾で阿曾がクレヴァスのそばに「小さな山小屋」を建て、ハナの死体が「氷河の左岸に浮きあがる」のを待つのも、アークライト大尉の「妹が兄の死体をグラランド・ミュレの山小屋で待つていた。死体は『略』ボツソン氷河の左岸に浮ぶことになつていた。」とあるのと類似する。さらに、新婚旅行で雪の橋が崩れ、氷河の割れ目に落ちたハナの死体を二十二年後に見出すのも、「新婚旅行」の際「橋が崩れて氷河の割目におちこんでしまつた」夫の死体を二十一年後に回収したウエブスター夫人の話と類似する。加えて、阿曾が「氷河の移動を研究してゐたフーギ博士」の故智「方法」にならつて小屋を建てたというのも、「屍体を運ぶ氷河」の「氷河学者としての先人はフーギ博士である。」に拠つていよう。拙稿「白雪姫」の材源と語り——久生十蘭論Ⅷ——（二〇二〇年六月「国語国文」）では不明とした、フーギを「博士」とする情報は、ここから得られたと考えられる。

なお、「屍体を運ぶ氷河」の掲載誌「カトリック ダイジェスト」は、すでに前掲「新西遊記」（昭和二十五年十二月「別冊文芸春秋」）において、昭和二十四年三月同誌掲載のアベ・ユック「韃靼見聞記」が利用されていた（本稿一参照）。

「白雪姫」と類似した設定に、「夜の鶯」（昭和三十一年六月「七月NHK第一放送」）がある（『定本久生十蘭全集』10「二〇一一年十二月国書刊行会」『夜の鶯』の「解題」）。その第五く七回で、中川優子（ハナに当たる）は相良郁夫（阿曾に当たる）を谷川岳へ引っ張り出し一緒に死ぬつもりだったが、郁夫が身に代えて彼女を助けたため、二人の心が通じ合う。本作の

ハナが地中海廻りをアルプス廻りに変えさせ、氷河を歩いてみたいと言い、阿曾の選んだガイドに反発してガイドなしで氷河に向かったのも、同じ動機だったかも知れない。

#### 四、「鈴木主水」——幸田露伴「幕末の政治家」——

「鈴木主水」（昭和二十六年十一月「オール読物」、ノチ『うすゆき抄』所収）における榊原政岑と鈴木主水の形象に関して、幸田露伴「幕末の政治家」（初出題「反魂香」明治三十年四月「新小説」、ノチ同三十四年九月春陽堂「譚言」に前掲題で収録。引用は『露伴全集』五「昭和二十六年三月岩波書店」所収）を追補したい。

「鈴木主水」の政岑は「顔に間の抜けたところがなく、容貌はむしろ立派なほうだが、ツルリとした粹好みの細面がいかにも芸人染みたふうにみえ、殿様らしい威容はどこにもなかつた。甲高い、よく透る声で早口にものをいひ、かならず人先に発言し、真面目な話にも洒落や地口をまぜ、嘲弄するやうな言ひかたをする。『略』なにによらず一通りのところまでやるので、一廉の器量の持主のやうに買ひかぶられる」（二）とある。これは、「幕末の政治家」中の「安藤対馬守」と「岩瀬肥後守」に拠つていよう。「安藤対馬守」には「顔に間の抜けたところ無く、如何にも粹にて那処やら三味線引ききでも云ひたき風あり。されば威厳といふものは乏しけれど、物の理解は左も／＼敏げに、高く清みて透る声にて、やゝ捷口に物言ひたまふさま、おろかなる眼には伶俐聡明の人と見えたり。」とあり、「岩瀬肥後守」には「挙動やゝ軽くして今の所謂才子肌ともいふべし。

高声のハキ／＼したる物言ひにて、人先に發言し、よく自らも笑ひ人をも笑はしめ、面白からぬ談話中にも茶利を交へ警語を放ち、時には人を呑んでかゝりて、嘲弄するとまでにはあらねどやゝ其気味あることあり。」とある。これらを取り合わせ、強調したものであろう。特に、前者の「三味線引きとでも云ひたき風」は、拙稿『鈴木主水』における忠義と私情——久生十蘭論VI——（二〇一五年七月「国語国文」）で明らかにした三田村鳶魚「阿波の十郎兵衛」『芝居ばなし』第二編「昭和二年一月宝文館」所収）中の「豊後ぶしの引がたり」をした政客像と重なるため、注目して取り入れたのかもしれない。

また、大人になった主水の「顔は薄皮だちで、薄皮立つて」色が美しく、「略」肩幅が張つて上背が増し、キツタリとして、袴のつきがよくなつた。髯のあとが青々とし、口元にゆるみがなく、太く、静かな声が堅く結ばれた唇から口重に洩れてくるところは「ところなどは」、いかにも沈着な人のやうに見える。」（二）とある。これも、「幕末の政治家」中「安藤対馬守」の「薄皮だちの色美しき人にて、「略」男ぶり好く、「略」身体の社稷つきよく、」と、同じく「堀織部正」の「身幹すらりと大柄にて、「略」髭鬚のあと青々と、「略」。キツタリとしたる身体つき緩みなく、口重にて太く静かなる声の、「略」例の大きな口の堅く結ばれたるより洩れ出づるさま、如何にも沈着なる人のやう見えたり。」を取り合わせたものであろう。

「鈴木主水」が露伴「雪たたき」（昭和十四年三月／＼四月「日本評論」）に依拠していることは以前報告したが（拙稿「幸田露伴「雪たたき」の構想——久生十蘭「鶴鍋」への影響に及ぶ——」（二〇一六年九月「京都大学国文学論叢」）、本作は同じく

露伴の「幕末の政治家」も取り入れていたのである。

## 五、「ボニン島物語」——『二戸聞書』『しぐれ草紙』 鴈外「高瀬舟」——

まず、「ボニン島物語」（昭和二十九年十月「文芸春秋」）の同時代評として伊藤整「近視的方法と遠視的方法 文芸時評下」（昭和二十九年十月八日「朝日新聞」）を紹介したい。伊藤は、本作が「中間小説」などではなく、「今の純文学作家たちの多くの人の作品よりもはるかに「純文学」だと思ふ外ない、という結論に達した。」として、細かな描写による「近視的方法」ではなく、「カエサル」の「ガリア戦記」、鴈外の「北条霞亭」露伴の「運命」「聖書」等々。」のように事実を淡々と記す「遠視的方法」によつて「思いがけない魅力を発揮」し、「怖ろしい力を示す」作品だと高く評価している。

「ボニン島物語」には、天明三年（一七八三）の大飢饉で南部領三十万人の領民の四分の一が餓死したとあるが、これは山口弥一郎『二戸聞書』（昭和十八年十月六人社）「後篇 東北の生活研究資料補遺」「十七、凶作」に拠つていよう。すなわち、天明三、四、五年を中心とした前後数年に亘る凶荒は南部藩凶作の最大なるものであり、餓死者七万五千八百八十人、他領退散者三千三百三十人、空屋一万五百四十五軒と報ぜられてゐる。当時南部藩の総人口は三十万と算せられてゐたから、その約四分の一が餓死してゐる事になる。（一〇八頁）

また、実用流の名手田中久太夫が平山行蔵に実用流を学んだ

という設定は、『二戸聞書』「序に代く」(Waga Kenko no Narikitaru) (田中館愛橋) に、愛橋が「六、七歳から武芸をやりました。これは平山行蔵(号子龍)の開いた実用流といふので」(三頁)を参照しよう。

天明の飢饉で犬一匹五百文で売買された話以下は、拙稿「漂流、無人島、楽園幻想——久生十蘭論IV——」(二〇〇八年五月『説話論集』17)で指摘したように、橘南谿が津軽を旅した時の見聞記に拠っている。とはいえ、これは版本『東遊記』に未収録のため、久生十蘭の依拠文献は不明であった。しかし、『二戸聞書』「十七、凶作」にはこの南谿の見聞記が引かれており(一〇八―一七頁)、直接にはこれに拠ったと考えられる。なお、『二戸聞書』のほか、小野武夫『増補農村社会史論講』(昭和二十二年一月再訂増補八版巖松堂書店、三二五―三三三頁)や本庄栄治郎『近世社会経済叢書』七(昭和元年十二月改造社)所収柴田善伸「米価記」(三〇〇―七頁)にも同様の記事が見えるが、「ボニン島物語」の他の個所にも『二戸聞書』に拠った個所があることから、直接の典拠は『二戸聞書』と考えられる。

「ボニン島物語」で深志と駒三郎は、漂流民の湊屋清兵衛と名子百姓(主家に隷属する下層農民)の庄吉を送って、天保の大飢饉のあとを辿るように奥州街道を旅するうち、清兵衛等が暮らしていた小笠原諸島に渡りたいと清兵衛に相談する。そこは食物が満ち溢れ、働く必要のない楽園のような島々だからである。しかし清兵衛は、むしろそれゆえに皆が怠け者になってしまい、数の多さを恃んだ名子らによる身分の逆転現象が起ったと語る。すなわち、清兵衛や船頭らを名子に落とし、自分

たちは旦那になって楽をするというものである。それは、名子の庄吉が船持ちの清兵衛を呼び捨てにする一方、清兵衛が「庄吉さん」と呼ぶことで暗示される。以上のうち、「ボニン島物語」で、

名子といふのは、地頭や地主から家と畑と農具を借り、その家の持物になつて、死ぬまで奴隷のやうに働かされる貧農のことで、生涯、米を食はず、名子のそつちら稗といつて、飯時になると、井戸や川の近くへ行つて、稗だけのボロボロ飯を冷水で飲みくだすといふ

と解説される「名子」は、『二戸聞書』後篇の「三、名子制度」に拠っている。すなわち、前引前半部は、「概して言へば土地も家屋も全然所有せざる貧農、所謂名子が地頭、「略」と称せられし地主より家屋敷及び耕地、山林、原野、農具、家具、家畜等を貸与され、其の家に居住し、其の土地を耕作して生活資料を収益し、其の代償として地頭の要求に応じ賦役に服し、尚ほ名子は地頭の命令を絶対に遵奉する精神を保持し、主従関係に等しき隷属的關係にあるものなり。」(七五頁)等とあるのを要約したものである。引用後半部は、同書前篇の「第三 食物」「十二、稗食」に、一般の家では米と稗半々では贅沢とされ、米三・稗七の割合が普通だったが、「貧しい家ではそつちら稗とて稗のみ食べた。」(一五頁)、「米の混じらない飯は附着力がなくボロ／＼であるため、農夫等は昼飯の時は冷水で吞み下すか、又は河辺でこの稗食を食べる。」(同)に拠っている。ただし、「家の者は白米を多く混じて食つても名子や奉公人は稗を多く混じて食ふものだとして必ず稗を多く入れて食つた。」(同)とあるように、実際は名子も米の混ざった飯を食べていた。逆に貧



しい家の農民は、名子でなくとも稗のみを食べる。しかし本作では、名子は「生涯、米を食はず」と稗食を名子に限定することで、その奴隸的身分を強調したのである。

また、名子が「満足に子供の名ひとつつけられず、正月生れた女の子はシヨガ、二月に生れたのはニガ、三月に生れたのはサガですましておくといふ始末である。」については、小川渉『しぐれ草紙』（昭和十年九月飯沼関弥）に拠っている。巻三「八二、南部地方の景状」に、「七戸地方の僻村には一種の人名あり、正月生れし女子にはシヨガ、二月生れしにはニガ、三月生れしにはサガ、四月生れしにはシガその以下は略と名くるありて同名のもの多し、「略」もと文字の少きによる所なり、」（三九六頁）とある。南部領民の文旨の例として示される「南部の旨暦」も、これ自体はよく知られたものだが、同じく「八二、南部地方の景状」に「盛岡にては贅暦めくろしよみといふを製し発売せり、即ち略暦にて」（三九一頁）云々との解説がある。

こうした文旨の名子と旦那・船頭との身分の逆転は、身分制度が人々の骨髄に徹していた江戸時代には考えにくい。しかし、森鷗外「高瀬舟」（大正五年一月「中央公論」、以下昭和三年一月改造社『現代日本文学全集』第三篇「森鷗外集」所収による）にも類似の設定があった。弟殺しの罪で遠島となった喜助を京都から大阪へ送る同心羽田庄兵衛は、喜助の足を知る心に感銘を受け、これまで呼び捨てにしていたのに、思わず「喜助さん」と呼び掛けてしまう。庄兵衛の目には喜助が、その「頭から毫光ごうくわうがさすやうに思つた。」と、仏のように映ったからである。一方「ボニン島物語」でも、「旦那」とされる清兵衛は、島で起こった身分の逆転を引き継いで名子の庄吉を「庄吉さん」

と呼び、庄吉は「清兵衛」と呼び捨てにする。心ならずも相手を「さん」付けて呼ぶ「ボニン島物語」と、心服の余り自然に「さん」付けて呼んでしまった「高瀬舟」とで、庄兵衛・清兵衛の喜助・庄吉への思いは対照的だし、「高瀬舟」の場合は身分というよりも人間としての格の違いなのだが、いずれも自分より下の身分の男を「さん」付けて呼ぶようになる点が共通する。

「高瀬舟」との類似はこれに留まらない。庄兵衛が罪人喜助を移送したように、本作の深志と駒三郎も、洲崎の浜に漂着した清兵衛と庄吉を大湊まで移送する。その際の態度も、「高瀬舟」の喜助は庄兵衛に対して「いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分を公儀の役人として敬つて、何事につけても逆はぬやうにしてゐる。」一方「ボニン島物語」の清兵衛・庄吉も、駒三郎から呼びかけられれば、「はい」と答へるなり駆け寄つてきて、神妙なやうすで道の上に膝をついた。」で類似する。ただし清兵衛と庄吉は、口封じのために自分たちが早晚斬られると考え、いつそ早く斬られたいと思つて駆け寄つたのだった。

第三に、わずか二百文の銭に満足し、島での暮らしを楽しみにして働くとうする喜助の勤勉・寡欲と、わずかな土地を奪い合つて小島に分かれ住み、女と酒に溺れた上、さらに労働者を連れてこようとする名子たちの怠惰・強欲は、同じく島に住みながらもことに対照的である。「高瀬舟」の世界を意図的に変えたのが「ボニン島物語」なのであった。

最後は、「高瀬舟」の「庄兵衛」と本作の「庄吉」「清兵衛」の類似である。前掲拙稿で述べたように、「庄吉」という名は

江戸時代の漂流記「ペラホ物語」に拠ったと見られるものの、「庄兵衛」と「清兵衛」は無関係とは思えない。

以上、身分の転倒、移送される男が役人に示す恭順な態度、身分が低く貧しい男の勤勉・寡欲と怠惰・強欲の対照性、名前の類似等、「ボニン島物語」が「高瀬舟」に拠ったことを確認した。

## 六、「奥の海」——標題、三田村鳶魚、日光

礼幣使——

拙稿「ある姫君の物語——久生十蘭論Ⅴ——」（二〇一〇年四月「国語と国文学」）で指摘したように、「奥の海」（昭和三十一年四月「週刊朝日別冊」13）という標題は、藤原定家などの和歌で使われた歌語でもあった。拙稿で言及したように、本作は『西鶴諸国はなし』（貞享二年「一六八五」）巻四の二「忍び扇の長哥」（参照本文不明のため、仮に日本名著全集『西鶴名作集 上』昭和四年八月を用いた）に拠った可能性が高い。そこで、例えば西鶴との縁からその『一目玉鉾』（同、下、同年十月）を参照すれば、巻一に「奥の海」として、「尋ね見るつらき心の奥の海よ汐干の方「潟の意」に「の」の誤り」いふかひ「貝」「甲斐」を掛ける」もなし「たつねても他し「あだし」心の「を」の誤り」奥「置く」と掛ける」の海の荒き磯辺は寄舟もなし」（二九五頁）の二首が挙げられている。前者は『新古今和歌集』巻十四（恋四）の藤原定家の歌、後者は『続後拾遺和歌集』巻十一（恋一）の常磐井入道前太政大臣の歌である。ここでの歌語「奥の海」は、潮が引いて貝のない陸

奥の海の潟や、舟を寄せ付けない陸奥の荒磯から、つれない人・他に心移す人との断絶が含意されている。知嘉姫を尋ねて陸奥に下った金十郎は、「なにかたいへんな失敗をやらかしたのにちがいない」と気づいてはいても、彼女が会ってくれない理由が最後まで分らない。そうした金十郎の孤絶感が「奥の海」という標題に籠められているのではないだろうか。

また、位の高い公卿の娘が適当な結婚相手に恵まれない本作の設定は、前掲『鈴木主水』における忠義と私情で指摘した三田村鳶魚の著作も参照された可能性がある。すなわち、「江戸末期の困者」の「安囲から月囲へ」（昭和二十三年六月青蛙堂書房『女の生活 江戸風俗志（一）』所収）には、「京都市民と同様に、御公家様なるものが又ひどくつまやかなものでありまして、看板ばかりでかいけれども、中身はさう往かない。「公家の位倒れ」といふだけあつて、自分の娘を売物にして諸大名の援助を受ける。」（一八五頁）とある。「稼ぐ御殿女中」の「夢茶屋の奇詭」（昭和九年十一月早稲田大学出版部『江戸の女』所収）にも、「禄の少い位倒れの公家衆は、お気の毒だが娘の捌け口を其処「諸大名の夫人」や「お妾」に求める。その御縁が金の蔓でもあつて苦しい生計の幅も出来る。」（三三九頁）とある。同様の文言は「黄門様の八ツあたり」の「白蓮女史ばかりか」（昭和八年十一月早稲田大学出版部『御家騒動』所収）にも見える。鳶魚が語ったように、いくら貧乏でも（むしろ貧乏だからこそ）、公卿の結婚相手は裕福な大名になる。本作の材源となった篠田鉦造『明治開化綺談』（昭和十八年三月明正堂）「凡帳の影の御姫様」の場合も、「富豪」「豪族」だったからこそ、公卿の娘と結婚できたわけである。

「奥の海」で、烏丸中納言が毎年日光礼幣使の副使を務めるのは、篠田鋌造『幕末百話』(昭和四年七月万里閣書房)「七五 日光礼幣使の話」に拠っていた(前掲拙稿参照)。五十嵐富夫『日光例幣使街道』(昭和五十二年三月柏書房)は、木崎宿(現・群馬県太田市新田木崎町)の定助郷であった世良田村(現・太田市世良田町)の歴史を記した『世良田村史稿』を引いて、駕籠かきに徴用された人足が日光例幣使の随員に「なにがしかの金子を出せば事なくすむが、然らざる時は駕籠より故意におちて、こら何という無礼を至す、そのまゝには差置かぬぞとおどして、金子をまきあげた」(七四頁)不法行為を紹介している。島崎藤村「夜明け前」第一部第一章四(昭和四年七月「中央公論」、第八章一(同誌昭和六年四月)、第十二章四(同誌昭和七年一月)でも、日光例幣使が献上金を要求するため百姓等に恐れられていた話がある。阿川弘之「煙管」(昭和二十八年三月「小説新潮」)は、末尾に「『幕末百話』に拠る」と注記してこの話を使っていた。

なお、拙稿で言及した『漫談明治初年』(昭和二年一月春陽堂)は、「亜墨利加<sup>アメリカ</sup>討」(昭和十八年一月「講談倶楽部」)「玉取物語」(昭和二十六年十月「別冊文芸春秋」)のほか、「妖婦アリス芸談」(昭和二十五年六月「文芸春秋」増刊「涼風読本」)一でも用いられていた。アリスの祖父が日本橋青物町で下総屋という呉服屋をしていた等は『漫談明治初年』「最初の輸入商(富国屋吉右衛門)」(鷺見左門氏、三一九〜二二頁)に、オランダ

公使と長命寺のお花さんの話も「長命寺のお花さんとオランダ公使」(田中智学氏、三〇三〜三〇七頁)に、それぞれ拠っている。アリスの身の上話という体裁や語り口も『漫談明治初年』を模している。

### むすび

以上の考察に際し、国会図書館デジタルコレクションによる全文検索は極めて有効な手段であった。逆に言えば、久生十蘭は先行資料からポイントとなる文言をかなり忠実に引用し、作中に溶け込ませていたわけである。以前、「コラージュ風」(前掲「西蔵への旅、西蔵からの旅」)と評した執筆手法は多くの作品に共通するものであった。

「付記」「新西遊記」関係の特別資料閲覧にご高配賜るとともに、雑誌記事の出版調査にご助力いただいた神奈川近代文学館資料課 藤木尚子氏にお礼申し上げます。

引用は原則として常用漢字を用い、ルビを適宜略した。／は改行を示す。

本稿は二〇二二年度〜二〇二四年度の京都大学における講義に基づく。

(すだ ちさと・本学大学院人間・環境学研究科教授)